
Sunny Day Bloom 1

高橋はさみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sunny Day Bloom 1

【Nコード】

N0201B

【作者名】

高橋はさみ

【あらすじ】

人間の少年の身体を乗っ取って、悪魔と人間のメイドさんと旅をしている天使サニー。まったくバラバラの三人が旅して、様々な事件に巻き込まれていく。その第1話。

0. サニー

0. サニー

天使と悪魔は昔から仲が悪いらしい。

天使Ⅱ善者、悪魔Ⅱ悪者。

それが世間一般の概念であるが、中には異例もあることを僕は旅を始めてから知った。

僕はサニー。

とある少年の身体をのっとり、人間の世界で旅をしている天使である。

そして僕と一緒に旅をしているのはナーレスという名前の悪魔である。

僕がこの少年の身体をのっとり、最初に目にしたのが、ナーレスだった。

無論、最初は敵だと思って散々攻撃したが、彼は僕よりもずっとずっと強い高位悪魔で、全然歯がたたなかった。

その後も僕は彼に何度も挑戦したけれど、傷一つ付けることもできず、気がつけば、こうして一緒に旅をしていた。

そして、ナーレスが全然悪い奴じゃないこともよくわかった。

彼は悪魔だけど、人間の姿をしている。

変装、とでも言うべきだろうか？

栗色の腰よりも長い髪の毛を風にさらさらとなびかせ、紫色のゆったりとローブの裾から細くて長い足が伸びている。

どこから見てもまさに美形という言葉の似合う容姿をしていた。

天使よりも美しいとはまさに彼のことかもしれない。

さらに、彼には人間の仲間がいる。

スリィという女の子だ。

桜色の髪の毛を二つに分けて結び、紅い縁のメガネをかけて、深緑色のワンピースを着たメイドさんだ。

とても可愛い容姿とは対照的に性格はとてもさっぱりとした姉貴肌。こんな目の保養になるような二人と旅をしていると、僕の印象はとて薄く感じられてしまうのが少し悲しい。

「そんなサニーは胸まで伸ばした茶色の髪の毛の先が縦ロールになっている金色の目の天使さん。

元の人間が着ていた水色のつなぎがとてもさわやかな好少年。

かわいくて、思わず食べてしまいたい。」

「……ちよつと本気に聞こえるから、やめてくれ。」

ナーレスは僕の背中を叩きながら、大笑いしている。

「やおいだねえ」とスリィがしみじみと腕を組んで、小さく笑う。そんな二人に囲まれて、僕は苦笑い。

これが日常。

これが楽しくて、僕はこの二人から離れられない。

天使と悪魔と人間と。

3人の旅は今日も始まるのだ。

1. 国

1. 国

僕たちは山をいくつかの山を越え、小さな王国にたどり着いた。

何度、地図を見てもそこには王国があるなんて、記載されていないかった。

それでも、久しぶりにゆつくりとベッドで寝ることができる、ほっとした気持ちで入国した。

「この国の名前はなんと言うの？」

スリイが、入国手続きの担当者に聞いた。

「……ユードラ王国といいます……。」

担当者は下を向き、小さく弱弱しい声でそう応えた。

「ユードラ……。」

パスポートを受け取りながら、ナーレスが国の名前を復唱し、パスポートの入国印を見ていた。

僕も自分のパスポートを見る。

入国印は女性の顔だった。少し……いや大分不気味である。

「やっかいなところに来たな。」

ナーレスのキレイな苦笑いに、僕とスリイは顔を見合わせたのだった。

僕たちは適当なところに宿をとった。

当然だけど、スリイは一人部屋である。

時々ナーレスが夜這いに行くが（笑）、毎回門前払いにあっている。きっと本気を出せば、スリイなんて片手間で襲っちゃえるのだろうが（笑）、それをしないところがナーレスの紳士なところだと思う。ナーレスとの熱いじゃんけん大会に惨敗し、僕が床に毛布を敷き始めたとき、ベッドの上のナーレスがこんな話を始めた。

「昔々、山間に小さな王国がありました。

国を囲む山々の中が一番高い山の上に、雲に隠れるようにして立派なお城が建っていました。

そこに済んでいた王様はとてもわがままで、自分のお城を大きくすることが大好きでした。

国民の生活なんて気にせずに、どんどんお城を大きくしました。

国民はみんな心の中で王様を呪っていました。」

ナーレスはベッドの横にある窓から、外を見ている。

僕に視線を向けることなく、話を続けた。

「そんなある日、まるで国民の願いが届いたかのように、王様が突然亡くなりました。

立派なお城と7人の女王を残して……。」

ナーレスがベッドから立ち上がった。

するとユードラを囲む山の一つに、雲に隠れるようにして、不気味で立派なお城がはつきりと見ることが出来た。

「その王国の名前はユードラ。つまり今、俺たちが滞在している国だよ。」

僕はお城から目を離すことができなかった。

いくつもの塔からなるそのお城はとても構造が複雑そうに見えた。

月の光に鉄の無機質な光が反射し、とても不気味で幻想的なお城だった。

「今も7人の女王はあのお城に？」

「いいや、大昔の話。とっくにみんな死んでいるはずだ。

それに俺の記憶が正しければ、女王全員子供に恵まれず、王家は途絶え、国は村に成り下がったと聞いていたんだけどな。」

そういつて、ナーレスがもう一度窓に近づいた。

「王家は途絶え、誰もお城にいないはずなのに、明かりともっている。

人々は皆、何かに怯えたように震えながら生活をしている。

何かないわけないだろ？」

ナーレスの少し困ったような笑顔を見た後、僕はとても邪悪な気配を感じた。

僕は窓の外を見渡す。

ナーレスも同様の気配を感じ取ったらしく、魔法の呪文を唱え、左手を床にかざした。

床に黒い魔法陣が現れ、光を発したと思うと次の瞬間、魔法陣の上にスリイの姿があった。

「どうしたの？」

突然の状況に、少しとまどいつつ、スリイが立ち上がりナーレス後ろに身を潜めた。

彼女もただならぬ気配を感じているようだ。

「くるよ、くるよ。」

ナーレスが不適な笑みを浮かべながら、左手に魔法陣を出現させる。悪魔は、左手に魔力を込めて、魔法陣を作り出し、そこから魔法や魔物を召喚する。

僕も自分の武器である、白銀の柄の長いアックスを、呼び出し、手に持った。

勢いよく、部屋の扉が開いたかと思うと、ナーレスが左手を扉のほうにむけ、魔法を放った。

そして、入ってこようとしたものに命中し、人間の声ではないような不気味な断末魔を上げ、倒れた。

やってきたのは一人ではなく、不気味にうごめくそれは部屋にぞろぞろと侵入してきた。

「何あれ？何あれ？何なのよあれ？」

スリイが嫌悪感むき出しの顔で、ナーレスの後ろに隠れる。

ナーレスの魔法攻撃に加えて、僕も向かって行きたいところだが、狭い部屋のため、下手に僕が前に出るとナーレスの魔法に巻き込まれそうだ。

ナーレスが何度も魔法を繰り返すが、相手はいくら倒しても沸き出してくる。

宿のことも考えると、そろそろ限界である。

「ナーレス、ここは一端引こう。宿が壊れるよ!!」

僕は窓に足をかけて、ナーレスの後ろで小さくなっているスリイの襟首をつかんだ。

そして、窓からスリイごと飛び降りた。

突然のことで、少しの間スリイの首を絞めることになったが、これはこれで仕方ない。

「ぐえっ」

と、いういかにもなスリイの声が聞こえたが、僕は白い羽を広げ、空中で改めて、スリイを脇から抱えなおした。

「殺す気？」

スリイの殺気だった睨みを苦笑いでごまかして、ナーレスを待った。ナーレスもやがて窓から飛び降り、僕とは対照的な漆黒の翼を広げた。

僕よりも、大きくて立派な翼だ。

何度見ても本当にきれいで、飛ぶ姿は天使よりも美しいと思った。

「大丈夫？」

「もちろん。しつこい奴らだったな。」

「これからどうする？」

「残念ながら、あの宿には戻れないだろう。とりあえず、朝まではどこかに身を潜めるしかないね。幸いなことに、この国は山々に囲まれている。」

「えー、また野営するの？」

スリイが深い深いため息をつく。

せっかく長旅でベッドにありつけたのに、ととても残念そうなスリイの気持ちは僕にも通ずるものが多々あった。

そんなスリイに苦笑いを向けながら、僕たちは山の中に身をひそめるため、宿を後にした。

暗くて見えないけれど、宿の窓から奴らがこちらをじっと見ているような気がした。

2. 招待

2. 招待

宿泊先を突然、謎の団体に襲われ、僕たちはとりあえず、国を囲んでいる山の一つに身を潜めることにした。

あの襲ってきたものたちは一体何だったんだろうか？

僕には黒くうごめく人間ではない物体に見えたが、攻撃していたナーレスは奴らの正体がわかったのだろうか？？

聞きたいところだが、僕とナーレスが交代で見張りをする事になったため、残念ながら僕とナーレスは離れたところにいた。

僕の横ではスリイが小さな寝息を立てながら、すやすやと眠っている。

今回の旅は人間の彼女にとってはなかなかキツイものになってしまったようだ。

やがて、空から数枚の黒い羽根が何枚か振ってきたかと思うと、ナーレスがゆっくりと降りてきた。

「異常なし。交代だよ。」

僕は頷くと翼を広げ、ゆっくりと飛び立った。

ナーレスとスリイの二人つきりになるけれど、たぶんナーレスはスリイに何もしないだろう。

絶好のチャンスじゃないの？と、からかい半分で言うとなーレスがまじめな顔で「愛があつてこそなのとかさ。」と、答えたのを覚えてる。

ああ、ナーレスはスリイが好きなんだな。

スリイはどうなんだろう？

それとも、実は僕の見えていないところで二人はラブラブなのかな？あれかな、今流行のツンデレって奴かな（笑）。

そんなことを考えて、僕は一人で苦笑いしてしまっていた。

あんまり高く飛ぶと目立つので、木の陰に隠れるようにして、ゆっくりと移動する。

二人が休んでいるところを囲むように、ぐるりと何周か周って、異常のないことを確認した。

二人のところに戻る前に、僕は一本の高い木の枝に止まり、お城を見た。

もう深夜だというのに、お城の窓からは赤い光が漏れていて、不気味さを演出していた。

ナーレスの話では、王家は途絶え、国は村になったと言っていたけれども、人々はここを国だと語り、外から来た僕たちは謎の奇襲攻撃にあった。

何で、僕たちが？

いけない、考えていても今はわからない。

とりあえず、明日は国の人たちに話を聞いてみたほうがよさそうだ。勝手に一人で納得し、僕はナーレスのところに戻ろうと、翼を広げ枝からジャンプした瞬間、銃声が響き渡り、僕の肩に熱い痛みが走った。

自分の考えに囚われすぎていたようで、周りに溢れている恐ろしい殺気に気づかなかった！

肩をやられ、うまく飛べなくなった俺はふらふらと地面に着地し、そこから走って逃げようとしたが、足がもつれ、結局その場に倒れてしまった。

足音が僕の方に近づき、僕の横で止まった。

「だれ？……」

「天使様ともあろうお方が私の気配にお気づきになりませんでしたか？

感傷に浸っているところを、お邪魔して大変申し訳ありませんでした。」

若い青年の声だった。

丁寧な口調だが、その響きは冷たく、僕を嘲笑っていた。

「本当に……邪魔してくれたよ……。」

僕は背中に冷たい汗が流れるのを感じながら、言葉を返す。ゆっくりと顔をあげると、銀色の髪をした色の白い青年が、薄く笑いながら僕を見下ろしていた。

「初めまして。城の使いのもので、セシルと申します。」
きっと、さっきの銃声はナーレスにも届いているはずだ。

彼がここに駆けつけるまで、どうにか時間を稼がなければ。

「僕は別に君に名前を名乗るつもりはないよ。それより、何で僕を殺そうとするの？宿に現れた奴らも君の手下かい？？」

僕の質問に彼は答えることはなく、かわりに僕の傷口を踏みぐりぐりとうぐった。

あまりの痛さに意識が吹っ飛びかけた。

「安心してください。殺すわけではありません。女王様の命令であなたをお城に招待いたします。」

「！」

僕が言葉を返す前に、銃声が再び響き渡り、僕は意識が完全に遠のいていくのがわかった。

やがて、奴は僕をゆっくり抱えると、お城の方に向かって歩き出した。

「俺の仲間に傷をつけて、勝手に持ち帰られるのは困る！」

ナーレスがセシルの前に空から降り立った。

「彼を放しなさい。」

後ろからはスリィがナーレスの召喚した魔物とともに立ちはだかっていた。

セシルはナーレスのほうに冷たい視線を向けながら、銃を手に取り、サニ一の額にあてた。

「持ち帰るのではありません。少々手荒ではありましたが、皆さんをお城に招待しただけです。普通に招待しても来てくれそうになかつ

たので、この天使様をえさにさせていただきました。今ここで、お二人が私に攻撃をされると残念ながら天使様の頭は吹っ飛びます。それでもいいんですか?? よくなかったら、道を開けていただきますい。」

ナーレスが左手に魔法陣を出現させる。

セシルはそれを一瞥し、

「あなたの魔法陣は確かに強力ですが、私だけでなくこの天使様も巻き込んでしまいますよ。」

今かなりの重症を負っている彼に、それだけの攻撃が耐えられると思いますか?」

「……。」

ナーレスは魔法陣を消し、道を開けた。

「ものわかりがよくて大変結構。」

後ろのかわいいお嬢さん、少しでも近づいたら天使様の頭に銃を撃ち込むので、そこでじっとしててくださいね。」

「っ!」

「それでは失礼。」

セシルはサニーに銃を突きつけたまま、ゆっくりと歩き出した。

ナーレスの横まで来ると、彼は足を止めた。

「そう、先ほども申しましたが、お二人もお城に招待いたします。」

明日の日暮れまでにお城にきてください。

私の名前はセシル。

城の者に私の名前を言えば、中に入ることができます。

来なかった場合は、この天使様の命がないとお思ってください。

楽な死に方はさせてあげませんので、よくお考えになったほうがいいと思いますよ。

では失礼します。」

セシルは素晴らしい残して、サニーとともに闇の中へ消えていった。ナーレスはスリィの横にいた魔物を返還した。

「どうするの?」

スリイの間にナーレスは眉根を寄せた不器用な笑顔を見せ、

「もちろん、ご招待を受けるさ。サニーが怪我をしていること以外はおもしろい展開だよ。」

ナーレスは怒っている。

スリイはナーレスの殺気を感じて、やっかいなことになったなあのため息をついた。

「何で、ヒロインの私じゃなくてサニーが囚われてるの??？」

実はちょっと不満なスリイの呟きにナーレスが苦笑いしたのは言うまでもない。

3. ブルーム

3. ブルーム

固い床の上で僕は目を覚ました。

ゆっくり起き上がると、肩と羽根に焼けるような痛みを感じて、少しだけ涙が出た。

どうやら2発目は羽根を撃たれたらしい。

ご丁寧に包帯が巻かれていたので、どうらや僕を殺すつもりはないらしいことがわかり少しだけ、ほっとしてしまった。

でも、囚われていることには変わらない。

ここはどう見ても牢屋で、快適な場所とは言えなかった。

怪我は重傷だけれど、動けないほどではないし、天使だから治癒は早いはずだ。

ナールスはたぶん、助けに来てくれると思うけど、何もせずここで待っているのはなんだか情けないから、とりあえず努力はしよう。

そんなわけで僕は牢屋の中をうろうろし始めた。

牢屋といえば大体地下にありそうだが、ここはどうやらお城のたくさんある塔の一つに作られているようだ。

鉄格子の外は螺旋階段で、階段沿いにずらり牢屋になっている。

なかなかおもしろい構造である。

牢屋に窓はなく、かわりに塔の一番上が吹き抜けになっていて天窓から明かりが注がれているようだ。

だから、牢屋にしては明るい。

ふと、階段のしたほうから、足音が聞こえてきた。

どうやら見張りが上がってきているらしい。

これはチャンスだ！！

「ブルーム、ちょっと離れるから、頼むよ。」

僕は自分自身に話しかけた。

すると僕の頭に直接、別の声が響いた。

OKの返事をもらうと、僕は身体から意識を手放した。

振り返ると、僕が乗っ取っていた人間の身体が立っている。

髪の毛の縦ロールはまっすぐなストレートになり、金色だった目が紅茶色に変わっている。

僕より少し悪そうな目で、彼は口を開いた。

「あいつの身体を乗っ取るのか？」

「うん、したらとりあえずここから出られそうだと思うんだ。」

「そう、簡単に乗っ取らせてくれるかな？」

彼は僕が乗っ取っていた身体を持ち主ブルームだ。

僕は意識体といって、実体のない幽霊のような状態になっている。このまま、今階段を上がってきているであろう見張りの身体を乗っ取り、牢屋を開けようという魂胆である。

「来たよ。」

ブルームの言葉を聞いて僕は牢の中から階段の方に移動した。

階段から上がってきた見張りは、僕を撃ったセシルだった。

僕はブルームと顔を見合わせ、とりあえず階段の上に身を潜めた。

セシルはブルームの牢屋の前で足を止めた。

「お怪我の具合はいかがですか？ 天使様。」

相変わらずの冷たい声だった。

ブルームは僕に一瞬だけ視線を向けてただけで、すぐにセシルから顔を背けた。

僕はセシルの背後にそっと忍び寄る。

「まあ、そんな怖い顔をしないでください。私の言うことさえ、聞いてくれれば悪いようにはいたしません。」

ブルームはまだ黙っている。

彼は僕としゃべり方や声が違うことと目の色が違うことを心配しているのだろう。

「天使様にぜひ会いたいと言っておられる方がおりました。」

その方にお会いし、力を貸していただきたいのです。」

僕はセシルのほぼ後ろにいる。

今、彼が振り向いて僕を見つけてしまったら、この作戦が失敗になってしまう。

ブルームは彼の注意を引くために、大きく目を見開いて、僕と違う色の瞳を彼に見せた。

「！」

セシルが気づいた瞬間、僕は彼の身体に入り、彼の意識を無理やり奥へ押しやり眠らせてしまった。

「大丈夫か？」

ブルームの声が正常に聞こえたので、乗っ取りは成功したようだ。

「何とかうまく乗っ取れたよ。」

彼の意識がいつ起きるかわからないけど、とりあえずはここから出られそうだ。」

セシルの服を調べると牢屋の鍵が出てきたので、鍵を開けた。

「うまくいったよ。俺がいなかったらできなかったことだぜ。」

「まったくだよ。俺がいなかったらできなかったことだぜ。」

「はいはい。」

ブルームは人懐こい笑みを浮かべながら、階段の下を見ていた。

「とりあえず、降りてみようぜ。奴も下から来たしな。」

「それにしても、僕に会いたい人って誰なんだろうね？」

「さあな。たぶんお前のボス^{セシル}だろうな。」

お前、丁度その格好だし、おもしろそうだからちよっと探ってみようぜ。」

「それより早く脱出してナーレスと合流しないと…。」

「まあまあ、俺こうして動くの久しぶりなんだからいいじゃないの。その身体でしばらく一緒に行動すればどうには敵の目もごまかせるよ。」

「で、でも…。」

「いいからいいから！はい、レッツゴー！！！」

意気揚々とブルームは階段を下り始めた。

僕も仕方なくセシルの身体で彼についていく。

ブルームはこんなに好奇心旺盛だったんだな…。

彼がどうして僕に身体を乗っ取られることになったかは別の話だけど、少なくともこんなに楽しそうな顔をしているのは久しぶりに見た気がする。

そんな彼に思わず身体を返してもらうことも忘れて、僕はこの不気味なお城を探索することになったのである。

4. うろろ

4. うろろ

サニーがセシルの身体を乗っ取り、元の身体を持ち主ブルームと脱出を成功させていた頃、メイドのスリィは単独でお城に潜入していた。

「まったく、何であたし一人でこんな物騒なところにいるのよ…ナールスってば、『俺はちょっと知り合いのところに行って情報を集めてくるから、先にお城に潜入してサニーを探してて。』

大丈夫、君は自分の身を守ることに關しては天才だから』とか、無責任なこと言ってるさ。

人の反論なんて聞きやあしない。もう。」

と、ぶつぶつ文句を言いながら、彼女はお城の大広間の隅に身をひそめていた。

大広間はその名の通りどこまでも広く、不規則に螺旋階段がたくさん並んでいた。

螺旋階段はこのお城を形成している塔に繋がっているようである。

「ここのお城の人って足腰が頑丈なのね…ナールスかサニーがいたら、羽根でひとつ飛びなのに…人間って不便で不公平だわ。」

スリィは螺旋階段を一つずつ目で追い、広間をうろろしている宿屋を襲撃してきた黒い物体がいないところを探した。

ぽつりぽつりと何箇所かにいる黒い物体はまるで地をすべるかのよう、うろろろしていた。

「あれは一体何なんだろう？まあ、あんまり仲良くなれなさそうだし、なるべく接触は避けたいかな。」

スリィがきょろきょろしていると、螺旋階段の中で一つだけ手すりに鎖がかけられており、通行禁止状態のものがあつた。幸いにも、

その階段の近くには黒い物体が一匹しかいなかった。

たぶん、結局は何箇所かの階段を上がらなければならぬわけだし、とりあえず怪しそうなものから当たってみよう、とスリイは思った。

スリイはそろそろと目標の螺旋階段に近づき、ある程度の距離から一気にダッシュした。

大広間にスリイ自慢の品である黒い編み上げブーツの靴音が響き渡り、黒い物体が一斉にスリイに注目した。

もちろん、目標の螺旋階段の近くにいたのもスリイに気づき、階段の前に立ちふさがった。

スリイは黒い物体をよけ、目的の螺旋階段を一周し、黒い物体にとび蹴りをした。

黒い物体がよろめいたとき、その反動ジャンプした。

すその長いスカートがひらひらと舞、純白のドロワーズが微かに見えていた。

階段の鎖を飛び越え、階段の上にふわりと着地した。

鮮やかな動きだった。

「ふふん、メイドさんだからって紅茶を入れるのが上手なだけじゃないのよ☆」

スリイの動きについていけない黒い物体を横目に見て、スリイは階段を駆け上がった。

「ふふふん、ちよろいもんよ。きつと足がないから、この階段は上がれないんだわ。」

余裕の表情で、スリイが下を見るとなんと黒い物体がふわりふわりと浮き上がってきているではないか。

そんなにスピードは速くないが、階段を走っているスリイにくらべて、スムーズな移動方法であることは間違いないかった。

「反則だわ！こうなりゃ、メイドのご根性を見せてやる！！」

スリイは階段を駆け上がるペースをあげた。

黒い物体から少しずつ距離が開く。

そして、いよいよ階段先のゴールが見えてきた。が、ペース配分を

考えないやけ走りに確実に疲れたスリィのペースが落ちてきていた。
「もゝ、だめゝ。」

スリィはのろのろと立ち止まり、手すりに掴まり黒い物体を見ながら呼吸を整えた。

黒い物体が確実に近づいている。

「もゝしんどの嫌だし、大人しく牢屋で寝たいかも。」

黒い物体がどんどん近づいてくる。

それをじっと見つめるスリィ。

黒い物体は集団でどんどんどんどん近づいてくる。

その様子はとても不気味である。

「やっぱり、あいつらに捕まるのは嫌かも…もう！」

諦めたように叫び、スリィはスカートをたくし上げた。

そして、大胆にも一段飛ばしで残りの階段を駆け上がった。

しかし、黒い物体はすでにそこまで来ている。

「もう、あたしも羽根がほしいようおう！！」

そう叫んで、彼女はどうにも最上階まで到達、そこにあった扉を開けて中に飛び込んだ。

そして、部屋をよく確認せず、とりあえず鍵をかけ、その場にペタンと座り込んでしまった。

「はぁ、はぁ、人間も、やれば、できる！…はぁ。」

ドアにもたれて呼吸を整えると、ゆっくり立ち上がり周りを見渡した。

そして、そこには予想外の光景が広がっており、彼女は言葉を失った。

そこはまるで女の子の子供部屋のように光に溢れ、かわいいらしい家具や人形がたくさん置かれていた。

この不気味な屋敷とまったくかけ離れた、とても素敵なお部屋だった。

「……かわいい……。」

スリィは素直にそう言葉にした。

部屋の中央にはレースのカーテンひらひらした天井のある小さなベッドが置かれていた。

そこには白いブラウスに首のところで黒いリボンをしたうさぎがおむけに静かに眠っていた。

「……うさぎ……？」

スリイがまじまじとうさぎの顔を見ていると、ぱちっとウサギが目を開いて、スリイは目があった。

「うわあ、起きた。」

「わあ、誰？」

二人：いや、一人と一匹は同時に声を上げた。

「うさぎがしゃべった？」

スリイが目をぱちぱちさせ、まじまじとうさぎを見ていると、うさぎはベッドの上に二本足で立ち上がり、スリイをまじまじと見返した。

「あなたはこのお城のメイドさん？」

「いえ、違いますけど……あの、何でしゃべれるんですか？」

「うさぎだってしゃべったっていいじゃありませんか。」

うさぎがやんわり微笑んだ気がした。

「私はステアといいます。」

「あたしはスリイ。」

「よろしくスリイ。」

ステアが小さな手（前足？）を差し出してきたので、スリイはそれをやんわり握って握手した。

「ところで、スリイはここまでどうやって来たのですか？」

「どうやってって、このお城の大広間からあの悪魔のような螺旋階段を上がって、ここに入ってきたのよ。」

ステアはそれを聞いて、少し考えるような様子を見せた。

「ここ……この部屋の扉は開きましたか？」

「へ？ ええ、普通に開いたわ……でも、今は開けないほうがいいかもね……。」

「そうですか、わかりました。」

ステアは窓のそばのカーテンをめくった。

そこには青いボタンがいくつか並んでおり、ステアはそのなかのいくつかを押した。

「あの、他にあたしに何か質問はないの？」

スリイの言葉にステアはキョトンとした顔で振り返った。

「他にですか？」

「だって、あたし達初対面だし、何であたしがステアの部屋にいるのか？とか聞かないの？」

ステアは少し考え、またふわりと笑って答えた。

「聞いてもいいですけど、絶対知りたいわけではありません。」

「そうなの？」

「ええ、少なくともあなたは私に敵意はないでしょ？それだけで十分です。」

ステアは最後に青いボタンをもう一つ押した。

すると、窓が開き外に続く階段が現れた。

階段の先はお城の中庭に続いていた。

「とりあえず、ここから降りましょう。必要な部分はおいおい移動しながら聞きことにしますがいいですよよ？」

仕掛けに驚いていたスリイはとりあえず、無言でうなずきこの不思議なうさぎについていくことにした。

「あ、行く前に一つ教えて。」

「なんですか？」

「ステアってオス？メス？」

スリイの言葉にステアは一瞬言葉を失ったが、次の瞬間大笑いを始めた。

「私はとても愛らしい外見をしていますがおスですよ。」

「そ、そう……それは失礼しました。」

スリイはちょっと顔を赤くし、下を見ながら彼についていく。

「いえいえ、気にしないでください。」

そう言って優しく微笑むステアを見て、スリィは彼はとても紳士だと感じたのだった。

スリィとステアが階段を下りると窓は閉じ、ステアの部屋はもとの静かな部屋に戻っていたのだった。

5. 昔話

5. 昔話

サニーとブルームが協力して脱出し、スリィが謎のうさぎステアと移動をともにし始めた頃、ナーレスはユードラから遠く離れた異国の地にいた。

真っ白な雪に覆われたその国はビチェスという。

そのビチェスの郊外にある大雪原にナーレスは立っていた。

彼の目の前には恐ろしく古い井戸がある。

無表情で彼はその井戸を眺めていたが、ついに彼は覚悟を決めたように口をへの字に曲げて、その井戸に足をかけた。

そして、雪のちらつく極寒の中、彼は井戸の中にダイブしたのである。

井戸の中の水はまるでナイフだった。

彼の皮膚に刺さるような痛みが走り、意識が飛びそうになったが、彼はなんとか、それをくい止めることができた。

無理やり目を見開き、井戸の底を見渡すと緑色に光るランプが見えた。

水の中なのに、そのランプには緑の炎がともっている。

ナーレスは必死に泳いで、そのランプに触れた。

「ん？」

白い長い髪を三つ綱にし、黒いドレスを着た女性は突然の訪問者の気配を感じ、入り口の方に振り返った。

すると、彼女が「入り口」と読んでいる、白い魔法陣の上にナーレスがびしょびしょの格好で立っていた。

「ルーティンさあ〜ん、この入り口もっと入りやすくないの〜

？」

ナーレスの情けない声にルーティンと呼ばれたその女性は、口の端をくいと持ち上げて、笑いをこらえた。

「わしはあいにく、誰にも会いたくないので、あのような入るまでに死にかける入り口にしている。確か、死んだ奴もいたな。」

ルーティンは小さなランプに明かりを灯した。

すると、魔法陣は発光し、ナーレスを包んだかと思うと、ナーレスの服や髪はいつのまにか乾燥していた。

「これはこれはどうも。」

ナーレスは自分の服装が乱れていないことを確認し、魔法陣から降りた。

その間にルーティンは別のランプに火を灯した。すると、ナーレスの前に椅子とテーブルが現れ、少し悪趣味なティーカップにどろどろの紅茶が入れられた。

ナーレスは苦笑いし、椅子に腰掛け紅茶を一口のみ、驚いた顔をした。

「案外、うまいっすね。」

その言葉を無視し、ルーティンは王座のような高級そうな椅子にゆったりと腰掛けた。

彼女の正体はランプの魔法使いラミア・ルーティン。

外見も名前の女性のようなだが、実は男性である。

ルーティンは今、この極寒のビチェス国の行方不明となっている王女の身体を乗っ取っているのである。

ちなみに彼は邪悪な魔法使いである。

「で、今日は何の用だ？」

「ユードラ国の昔話を聞かせてもらいたくて、あの恐ろしい井戸に飛び込みました。」

「わざわざ命をかけてまで、話を聞きに来るなんて、お前もよほど暇なのだな。」

ルーティンが椅子にかけてあったランプに火を灯す。

すると、部屋の壁一面が本棚になり、その膨大な本の中から一冊の本が、彼の手元にぱたぱたと鳥のように羽ばたいて、降りてきた。「今、仲間がその国のお城に囚われていたり、潜入したりしています。」

俺も続きたいところなんですが、あまりにも急で情報がないので、ここに来たわけです。」

「ふん、ご苦労なことだ。」

ルーティンはパラパラとページをめくった。

「一度しか言わぬから、よく聞いておれ。」

「はいはいさ〜!」

ルーティンは感情のない声で本を淡々と読み始めた。

「ルーティンの語ったユードラ国の昔話」

城を建てることを愛したユードラ国の王には七人の王妃がいた。

どのような経緯で彼女らがこの国に嫁入りすることになったのかは、わからないが、それぞれの王妃がそれぞれの理由で王を愛していた。最初の王妃は没落貴族の娘で、王の財力を深く愛していた。

二人目の王妃は建築家の娘で、王の建てているお城を深く愛していた。

三人目の王妃は学者の娘で、城に眠っている多くの本たちを愛していた。

四人目の王妃は隣国の第3王女で、政略結婚を強いられ、王に歪んだ憎しみを向け、王の存在を深く愛していた。

五人目の王妃は農家の娘で、王を深く敬愛し、お城の庭を深く愛していた。

六人目の王妃は大臣の娘で、王の持つ政権を深く愛していた。

七人目は魔法使いの娘で、王の四人目の妃を深く愛していた。

王が一番可愛がっていたのは一番年の若い五人目の王妃でまるで、二人はまるで親子のようだった。

王は誰とも交わらず、子を設けず、やがて四人目と七人目の王妃に

手にかかり、この世を去った。

殺人をした二人の王妃は六人目の王妃により牢に入れられた。

最初の王妃は国のお金を持って、故郷に帰り、三人目の王妃は地下の図書館に身を潜めた。

二人目はお城に残り、研究を続けたかったが六人目に追い出された。五人目は王に安全といわれていた部屋に逃げ、ずっとそこに籠った。つきり姿を見せない。

やがて六人目の王妃とその父親の大臣は国を支配し始めたが、国はすぐに衰退し、彼らは暴徒と化した国民に死刑にされ、国は静かな村になりさがったのだった。

まもなく、牢屋から白骨化した四人目と七人目の王妃が発見される。図書館に身を潜めていた王妃は生きていて、そのまま余生を本を読むことに費やした。

五人目の王妃は最後まで見つけることができなかった。

おそらく、誰も空けることのできなかった開かずの間で静かに生きを引き取ったか、窓からどこかに逃げたのあろう、ということになった。

村はこれからずっと静かで平穏であろう。

未来、唯一村の平和を乱すものがあるとすれば、それは魔法使いの娘であった七人目の王妃のことだ。

彼女の父はとても邪悪な魔法使いで、娘に滅んだ後の復活の方法を娘に伝えていたという噂を聞いたことがある。

長い年月を経て、もしかしたら、少しずつ彼女の怨念に魔力が蓄積し、復活を成功させるやもしれない。そのときは彼女の愛した四人目の王妃も生き返らせ、二人で再びこの国を苦しめることになるであらう。

どうか、そうならないことを祈っている。

「で、その祈りは通じなかったようですね。」

「だな。」

「最後にそれぞれの王妃の名前を聞いて良いですか？」

「ティラ、アン、ファム、ジェシカ、エストリア、ディラン、セシルだ。」

「セシル……ね。」

ナーレスは小さくそう呟いた。

「お望みの情報は得られたか？」

「ああ、お陰でばっちり核心に迫れましたぜ。」

ナーレスはにっこりと微笑むと、ルーティンの顔の前に急接近した。

「ありがとうございました。またヨロシクです。ちゅっ」

「！」

ナーレスはルーティンの唇に軽くキスをした。

驚き慌てるルーティンの姿が珍しくて、可愛くて、おかしくて、ナーレスは最高に楽しい気分になった。

「貴様、殺してやる！！」

「はいはい、またね♪愛してるよ☆」

ナーレスはそういい残して、魔法陣の中に消えていった。

そして、いつのまにかナーレスはさっきの冷たい井戸の中に戻っていた。

慌てて水面に出ようと、夢中で泳いだが、いつの間にか水面に厚い氷がはっている。

氷にはルーティンの姿が映っている。

「せいぜい、そこで苦しむがいい。」

ルーティンの冷酷な顔がふつと微笑み、そのまま消えた。

しまった！ここはまだ奴のテリトリーの中だ。

調子に乗った自分を呪いながらナーレスは必死に氷を押した。

あまりに慌てていたため、自分で魔法を使うことをしばらく忘れていた。

限界の近づいた頃、ふと、自分の能力を思い出したナーレスは慌てて左手に魔法陣を出現させ、氷を破壊した。

井戸から這い上がったと思ったら外は極寒の寒さである。

「もう少しずっと手加減してくれてもいいのに。」
ナールスは寒さに震えながら、ビチエス国を後にしたのだった。

6. 全員集合

6. 全員集合

「じゃあ、ステアは何であの部屋で眠っていたのかも、どれぐらい眠っていたのかもわからないってこと？」

「ええ、そうなんです。自分が眠る前の記憶がほとんどなくて…唯一ある記憶と言えば、」

「言えば？」

『この部屋は君の敵意のある人間には開けることはできないんだ。だから、君に危険が迫ったらここに逃げ込むといい。』

「と、いう声だけです。」

「それは誰の台詞？」

「それとも思い出せないのです。」

メイドのスリイと彼女がお城で出会った人の言葉をしゃべるうさぎステアは、この不気味なお城には似合わないようなきれいな庭を歩いていた。

庭にはたくさんの花と植木とオブジェが見るものを和ませていた。

「でも、とにかくスリイがああ部屋のドアを開けてくれなかったら、私はこれからも永遠とああ部屋で眠り続けなければならなかったでしょう。」

スリイ、どうもありがとう。」

「え？ いや、でも、本当に偶然だから…。」

少し、庭に見とれていたスリイは、ステアの思いがけない言葉になんとか気恥ずかしさを感じ、あたふたとしてしまった。

そもそも、彼の部屋には必死の思いで逃げ込んだだけなのだから。

ステアはやんわり微笑んで、彼女から視線をそらし、城の中を見た。
「ところでスリィ、あなたの探している仲間はどんな人なのですか？」

「え〜と天使だから白い翼があつて、縦ロールで青いつなぎを着ていて…。」

「…じゃあ、彼は違いますね。青いつなぎは着ていますけど。」

「へ？」

スリィが中を見ると、そこにはあのセシルと彼の攻撃から逃げている少年の姿があった。

少年は青いつなぎを着ていて、ストレートヘアーでそれはスリィのよく知る人物だった。

「ブルーム?!」

「彼も仲間ですか？」

「彼も、というか彼は探していた仲間の身体の人格で、彼は普段はいないんだけど、でも一応彼と一緒に旅をしていて…。」

「??」

「とにかく、彼も仲間だから、助けないと!!」

セシルの手にはあの拳銃が握られており、それに加えて黒い物体たちもブルームを追い詰めていた。

スリィは周りを見渡し、近くに置かれていたテーブルセットの椅子を持ち上げ、それを勢いよく窓に向かって振り下ろした。

激しい音をならし、窓は砕けた。

スリィはひよいと窓を飛び越えるとステアの方に振り返った。

「ステアは危ないからここで待ってて。」

「スリィ、でもあなた丸腰でしょ? どうやって奴らと戦うのです?」

「誰も戦いに行くつもりはないわ。」

スリィは余裕のない笑みを浮かべた。

「ちょっとは敵の数減らしてあげないと…こう見えても逃げ足は速いの。それに…。」

「それに？」

「そろそろあいつも帰ってくるわ。」

そう言ってスリィはステアにウィンクした。

そして、ブーツの音を響かせて走って行ってしまった。

「スリィ……。」

ステアはその場でしばらく心配そうに彼女を見送っていたが、やがて彼は庭の奥に走っていった。

「ブルーム！！」

「スリィ?! バカ、何で今出て来るんだよ？」

「あんたが一人で追われてるから分担してあげようと思ったのよ！」
スリィに気づいた何体かの黒い物体が彼女にめがけて擦り寄ってきた。

彼女はブルームと反対方向に走る。

「おやおや、メイドのお嬢さんもいたのですね。」

セシルの冷たい声がしたかと思うと、銃声が響き彼女の頭上で何かが割れる音がした。

スリィはとっさに前方にジャンプした。

すると、そこに螺旋階段の飾りの一つが落下した。

「二人とも、どこに逃げようというのですか？」

セシルの声を無視し、二人は柱の影で合流した。

「で、何であいつに追いかけられてるの？」

「実は……。」

さかのぼる事小一時間前、セシルの身体を乗っ取った天使のサニーとブルームはお城の中をいろいろ搜索していた。

そして、王座のある塔で、王座に座るガイコツを発見した。

ガイコツにはボロボロになったドレスが着せられていて、とても不気味な様子だった。

サニーがそれに近づくと、突然、彼は頭をおさえてうずくまった。

「サニー？」

「ブルーム、早くここから逃げて、セシルの意識が……くっ。」

サニーは懷にしまつてあつた、セシルの銃を投げ捨てた。

「はやく行け！！」

「サニーこそ、はやく俺の身体に戻れ！！」

「そんな暇はないんだ！ 僕が彼を食い止めている間に……っ！！」

「サニー！」

その場にうずくまるサニーを見て、ブルームは少し迷つたが、すぐに出口に向かつて走つた。

今まさに彼が出口から出ようとしたとき、ドアに銃弾が撃ち込まれ、ブルームは静止した。

「残念ですね。」

ブルームはゆっくり振り返る。

すると、転がつていた銃を拾い上げ、銃口をこちらに向けているセシルの姿があつた。

サニーの姿はどこにも見えない。

「私がこんなに早く目を覚ますなんて、予想外でしたか？」

「ちい……。」

ブルームは絶体絶命である。

ふと、彼の背に何かが当たっていた。

ドアノブである。

しかも、さっきの銃の衝撃か、それとも元からなのか、ドアから外れかけている。

恐らく、強く引くと簡単にドアから抜けてしまうだろう。

ブルームは迷ふことなくドアノブを強く引き、外れたそれをセシルの方に思いっきり投げつけた。

対応の遅れたセシルはそれを銃で撃つた。

その短い間ブルームはドアに体当たりし、そのまま螺旋階段をドアのソリのようにして滑り降りていく。

途中で、ドアが限界に來たのでそこから床に飛び降りて軽々と着地した。

すると今度はブルームの姿を確認した黒い物体が、彼に迫ってきた。セシルも銃を片手に階段を駆け下りてきている。とりあえず、ブルームは逃げることにした。

「と、いうわけなんだ。」

「なるほど。」

ちなみに長い話ではあったが、スリィに説明したのはわずか数秒の間のことである。

「サニーは？」

「まだ行方不明だ。」

「そう、じゃあとりあえず。」

「また逃げるか。」

二人は別々の方向に再びダッシュした。

スリィの逃げた方向にたまたま黒い物体が一体。それをよけようと方向を変えらともう一体。

スリィが「やばい」と思ったとき、彼女の前にいた黒い物体の上になんかが落下してきて、黒い物体は倒れた。それは土のたくさん入った植木鉢だった。

見上げると階段の上でステアがぴよんぴよんしていた。

「ありがとう！！」

スリィは再び走り出す。

スリィはそのステアのいる階段周りを走った。

よってきた黒い物体めがけてステアが鉢や庭道具（先の鋭いスコップ等）を落とす。

なかなかのチームワークである。

「調子に乗るな。」

セシルは銃を下ろし、両手を合わせたかと思うと何事かをぶつぶつ呟いた。

するとステアのいる階段が一瞬揺れた。

「え？」

その後すごい音とともに、階段が折れ、崩れ始めてきたではないか。ステアは階段から投げ出され、固い床に向かって落ちて落ちている。階段はスリイの真上に崩れ落ちている。

「きゃあ~~~~!!」

「わあ~~~~!!」

「はははは……?」

スリイとステアの悲鳴とセシルの冷淡な笑い声と階段の崩れる音は途中でぴたりとやんだ。

見るとスリイの足元に魔法陣が現れている。

彼女の真上で階段の瓦礫は静止していた。

そして、ばさばさと羽ばたきが聞こえたと思うと、ステアを抱えたサニーがゆっくりと地面に降り立った。

そして、階段の瓦礫はスリイをよけ、セシルの方に飛んでいった。

「何?!」

セシルはすばやく何かを唱えると、これらを自らの後ろにはじいた。

「魔法は今まで温存していたのかい??」

黒い羽根が降ってくる。

螺旋階段の一つにナーレスが不適な笑みを浮かべて立っている。

「おのれ……」

セシルは恐ろしい形相でナーレスをにらみつけた。

ナーレスはスリイたちの元に降り立った。

スリイも立ち上がり、ナーレスを先頭に3人と1匹はセシルと対峙した。

ナーレスはまっすぐセシルを指差した。

「全員集合。覚悟しやがれ。」

7. 天使

7. 天使

僕はやつともとの身体に戻ることが出来た。

ブルームも安心したように意識を静かに潜めていく。

ナーレスがとても格好よく、僕たちの前に立ち、セシルと向き合っている。

「一体どうするのでしょうか？私を殺しますか？何のために？」

「ちょ、先に攻撃してきたのはそっちじゃない！！正当防衛よ」

スリィの言葉にセシルは肩をすくめ、明るい声色でこんなことを言い出した。

「取引をしましょう。」

私の邪魔をせずにここから立ち去れば、あなたたちに何もしませんよ。」

「じゃあ、何で俺たちを攻撃したりした？」

「部外者というものは厄介ごとに首を突っ込みたくなると聞きますから。」

人質をとって、全員城に呼び込み、まとめて始末してしまえば良いと思っておりました。

でも、あなたたちの能力を甘く見ていたようです。

逃がして差し上げますので、この町から立ち去ってください。」

「随分勝手だな。でも、まあ、いいだろう。」

「ナーレス？」

ナーレスが以外とあっさりOKしたので、僕は驚いた。

「お互い手出しはしないってことで、じゃあさよならだな。行くぞ。」

「う、うん……。」

僕は何となく腑に落ちなかったが、彼に従った。

僕たちはお城の出口に向かう。

静かな沈黙に包まれて、僕たちの靴音だけが響いている。

なんともいえない悪寒が僕から離れなかった。

なんだろう、このもやもやした嫌な感じは。

そう、これは殺気だ。

僕たちに向けて恐ろしい殺気を取り巻いている。

……本当にこれで終わりかな？

「そんなわけ、ないじゃない!!」

「!!」

突然、ナーレスが剣を召喚し、僕に向かって突いてきた。

一瞬、僕が刺されるのかと思ったが、剣は僕の頬のすぐ横を通り過ぎ、僕の後ろにいた黒い物体に突き刺さっていた。

そいつがこの世のものとは思えない不気味な悲鳴を僕の耳元で下かと思うと、どろっと溶けて地面に広がった。

いつの間にか周りには闇にまぎれて黒い物体がたくさん。

「殺気はこいつらか。」

「え？ いつの間に？」

スリィがやっと黒い物体に気づき、少し遅れて歩いていたウサギさんを慌てて抱えて、僕たちの後ろに隠れた。

「そういえば、そのウサギさんの名前は？」

「ステアです。遅れながらよろしくです。」

「しゃべれるんだね。僕はサニー。」

「スーパーウサギだね。俺はナーレス。よろしく。」

瞬く間に自己紹介を済ませ、僕たちは黒い物体と向き合う。

「セシル！これは一体どういうことだ？ お前はウソツキか？」

「約束は破るためにあるんですよ。」

セシルは黒い物体の後ろで巨大な魔法陣を描いていた。

その魔法陣からは湧き出るように黒い物体が召喚されていた。

「あれじゃあ、キリがないな。」

「とりあえず、元を断たなきゃな。行くぞ！」

「うん!!」

僕はアックスを自らの手に召喚した。

ナーレスも剣を握りなおし、勢いよく黒い物体に飛び込んでいった。僕はその場に残り、スリィとステアの前で近づいてくる黒い物体を振り払っていく。

スリィとステアもうまく黒い物体の攻撃をかわしているようだ。

その間も魔法陣からは黒い物体が召喚され、その数はどんどん増えていく。

セシルはいつの間にか階段をのぼり、そこで魔法陣を描く。

そのため、上からも黒い物体が降ってきた。

「ナーレス、大技使うからよけてね!!」

僕はそれだけ言うと、右手を天にかざした。

それを見たスリィが慌ててステアを抱えて僕のすぐ横に来る。

ナーレスも、僕の丁度真上に陣取り、僕に振ってくる黒い物体をなぎ払ってくれる。

「聖なる天使の名において、闇の住人である汝らを浄化する!!」

僕の声とともに、右手が白い光を発する。

これを見た黒い物体が驚いたように奇声を発している。

僕はその白い光を握ると、しゃがんで地面にそれを埋め込むように手を地においた。

すると、光が僕を中心に円形に広がっていく。

その白い光の上に立っていた黒い物体たちが一瞬して溶けその残骸すらも消し去っていく。

宙に浮いていた彼らもその光に当たると、同様に消えていった。

やがて光が消えると、その場に黒い物体の姿はもうなかった。

「やったあ!!」

スリィがステアを抱えたまま、喜んでぴよんぴよんとはねている。僕もうまくいって、ほっとした。気が緩んだ。

「サニー!!!!!!」

ナーレスの叫び声が聞こえたが、その時はすでに僕の視界は真っ暗になっていた。

僕が魔法を使った直後から、僕の足元には黒い魔法陣があった。それが光が消えると同時に発動し、僕はその中に引きずり込まれていき、気を失った……。

ナーレスが叫んだときにはサニーは魔法陣に飲み込まれていた。セシルのほうを見ると、彼がサニーを抱えて階段の先にある。

「待て!!!」

ナーレスが飛んで、セシルの元へ向かう。

セシルは階段の先の部屋に入っていく。

それは王座のある部屋だった。

「アノ部屋は……」

ステアが小さく呟いたかと思うと、スリイの腕から飛び降りて、階段を駆け上がり始めた。

「え？ 待ってよ!!!」

スリイも慌てて、ステアの後を追う。

部屋の前でナーレスが扉をこじ開けようと体当たりしたり、剣を振り上げたりしたが、扉はびくともしなかった。

「ナーレスさん！ 私なら扉を開けられます!!! そこに連れて行ってください!!!!」

ステアの声にナーレスは頷き、彼を抱えて扉の前まで運んでやった。ステアは慌てて、扉の脇にあるブロックを一つ押すとそこからいくつかのボタンが現れた。

それをすばやい手つきで押すと、扉はゆっくりと開いていった。

「サニー!!!!!!」

部屋に入るとセシルが王座に跪いていた。

王座にガイコツの姿はなく、うずくまったサニーの姿が見えた。

「サニー?」

スリイが消えそうな声でサニーを呼んだ。

サニーはゆつくりと立ち上がった。

肩までの長さであった髪が地面に付くぐらい伸びている。
線の細い身体にかすかに丸みを帯びている。

ゆつくり手をかざすと白い翼が広がり、ぽつぽつと血の汚れが付く。

「遅かった……。」

ステアが悲痛な声で言った。

「天使との融合を果たした真のユードラ女王ジェシカの復活だ!!」
セシルの声が王座に響き渡った。

「サニー……。」

ナーレスが安然とした表情で、サニーの変わり果てた姿を見ていた。

8. 最期

8. 最期

はるか昔。

ユードラ国の王様を殺した四人目の女王ジェシカと七人目の女王セシルは六人目の女王ディランの手により、地下牢に幽閉されてしまった。

魔法使いのセシルに対して、普通の人間の少女であるジェシカは衰弱が早く、幽閉されて七日目に息をひきとろうとしていた。

「ジェシカ、しっかりするんだ！もうすぐ魔法使いの私の父が強力な魔法を使って私たちをここから救出してくれるはずだ。だから、それまでがんばるんだ！！」

「……無理よ。あなたがそう言うからずっと待っていたけれど、もう七日にもなるわ。」

もういいの…私、疲れたから……。」

ジェシカはセシルに悲しげに微笑んで見せた。

「諦めるな。まもなく来る！」

セシルはジェシカの元を離れ、小さく開いている牢屋の窓を覗いた。

「父上はまだか？！」

そんなセシルにジェシカは目を細めた。

（あなたがいなければ、悲しい女王としてこのお城の暖かい部屋で何不自由なく過ごすことができたのに……）

それが彼女の最後の思考となった。

セシルが彼女に再度声をかけたとき、彼女はすでに事切れていた。

「ジェシカ……ひとまず今はさようならだ。」

でも必ず、君を生き返らせる。

そのときは私と二人でこのユードラの新しい女王としてやりなす

ことを誓う。」

彼はジェシカの屍の前で、そう誓った後、自ら命を絶ち意識体のみの存在となった。

そしてこのお城で眠りに付き、長いときを過ごしたのち、好奇心で城に入った魔法使いの青年の身体と意識体に乗っ取り、復活を果たしたのだった。

「そして、私の愛するジェシカも今、ここに復活した。

これほど喜ばしいことはない!!」

セシルはそう言って、王座の前に立っているジェシカの姿をしたサニーに近づいた。

「何がどうなっているの???」

やっと階段を上り終えたスリイがぜえぜえ言いながら、ナーレスの肩をつかんだ。

「お疲れスリイちゃん。」

「サニー、随分髪の毛伸びたわね。お化け屋敷でバイトできそうね。」

「そんなのん気なこといつてる場合じゃないんです!!」

ステアがスリイのスカートをつかみ彼女の足にばさばさとぶつけた。

「サニーさんの身体と意識体はるか昔になくなったジェシカ女王に乗っ取られてしまったんですよ!! あそこにいるのはサニーさんじゃなくて、ジェシカ女王なんです!!!」

「落ち着いて、落ち着いてステア。」

スリイがステアの頭を軽く叩き、彼をなだめようとしながら、ナーレスの方に視線を向けた。

「本当にそうなの？」

「どうかね？」

「え？」

ナーレスのあまり進行でない声と台詞にステアが顔をあげる。

「うちのサニーをあんまり甘く見ないでほしいね。」

ナーレスがニヤリと微笑んだ。

ステアがゆっくりとセシルの方を振り返ると、セシルが驚いたように震えてサニーから後ずさりをしている。

そしてサニーがゆっくりと顔をあげると、姿は女性だけれどもその瞳の色はサニー特有の黄金色をしていた。

「私は：いいや、僕はジェシカじゃない。サニーだ！！」

その言葉とともに、サニーは羽を広げた。

それは真っ白に輝き、無数の羽根をその場に舞わせ、とても神々しかった。

「何故だ！何故、ジェシカは復活しないのだ！！」

「そのわけを教えてやるよ。」

ナーレスが剣を構えてセシルの後ろに立っていた。

「一つ、お前が天使のサニーの力を甘く見ていたこと。」

二つ、ジェシカの意識体がとっくの昔に消失していたこと。」

「そして三つ目は、ジェシカはあなたが思っていたほど、あなたのことを思っていなかった。」

「なんだって？」

「彼女の屍に残っていたのはこの姿の記憶と最後の思考だけだったよ。」

（あなたがいなければ、悲しい女王としてこのお城の暖かい部屋で何不自由なく過ごすことができたのに……）

「あなたがいなければ、悲しいけれどこんな最後を迎えることはなかったって……」

「そんな……そんなの嘘だ！！！」

セシルが呪文を唱え、魔法陣を出現させた。

しかし、そこから例の黒い物体は現れることはなかった。

代わりにナーレスが剣を構えて、近づいてくる。

「！」

「魔力切れだ。覚悟しろ。」

「くそっ！」

セシルは懷から銃を取り出しサニーに向けて発砲した。

弾はサニーの胸に命中し、赤い血の色が広がったが、サニーは少しだけ顔をしかめただけで、その場に立ち、セシルに哀れみの視線を向けていた。

「哀れなユードラ最後の女王よ、この世に永く居過ぎた。」

「！！」

ナーレスの剣がセシルを貫いた。

「いいかげん、お前も消えろ。」

「うう……ジェシカ……」

ナーレスが剣を引き抜くと同時に、セシルの身体がゆっくりと地面に崩れていった。

それと同時に彼女の召喚した黒い物体たちも消えていく。

そして、すべての悪が消えると同時に、サニーも元の姿に戻っていく。

彼の身体から離れるように、ジェシカの屍が王座に戻った。その胸の骨が数本欠けていたのは、先ほどのセシルの銃撃だろうか。

元の姿に戻ったサニーは自分の胸を押さえて、ひざをついていた。

「サニー、大丈夫？」

駆け寄ってくるスリィに、サニーは少し悲しい笑顔でうなずいてみせたのだった。

9. 出国

9. 出国

セシルを倒すとまるで魔法が解けたかのように、人々は明るく普通どおりの生活を取り戻した。

僕はスリィに怪我の手当てをしてもらいながら、そんな人々の様子を城の窓から見下ろしていた。

「にしても、今回はサニー、流血が多かったわね。天使じゃなかったら、死んでるわよ。」

「あははは、まったくです。」

ふと、僕は視線を感じて周りを見渡した。

すると端っこの方にちょこんと座っているステアと目が合った。

「ステア、どうしたの？」

「え？ あ、すいません。天使を見るのは初めてなんで、見つめてしまいました。」

それを聞いたナーレスが、僕とステアの間割って入った。

「魔族は？」

「あ、それも初めてですすみません。」

「じゃあ、よく見ておいてね。」

「は、はい。」

ナーレスを前にどこかたじたじな感じのステアが可愛くて、僕とスリィは思わずくすつと笑ってしまった。

「そういえばそろそろ君の正体も話してもらおうか。ステア改めエストリアくん☆」

「！」

ナーレスの言葉にステアが驚いて2、3歩後ずさった。

僕とスリィも意味がわからずに「え」という顔で顔を見合わせた。

「何で、それを知っているのですか？」

ナーレスは答えずにニツとちょっと悪そうな笑みを浮かべただけだった。

ステアはそんなナーレスと訳がわからずぽかんとしている僕とスリィを交互に見て、小さなため息をつくど、ぽつりぽつりと話を始めた。

ナーレスさんの言うとおり、私はユードラの五人目の女王エストリアです。

女王とは名ばかりで、その正体は人間の言葉をしゃべるおかしなウサギなのです。

しかもオス（笑）

私はもともと見世物小屋にいたのですが、ユードラの王様に気に入られ買い取られました。

そして、庭師として王様にはずいぶん可愛がっていただきました。

王様が殺される前夜、私はスリィと出会った部屋を与えられました。その部屋は時間の流れを止め、悪意あるものは扉を開けることは出来ない魔法の部屋だと。

私はその部屋で今までの長い時間を眠って過ごしました。

スリィが開けてくれなかったら、私はこのお城が壊されるまで一生あのまま眠り続けるところでした。

「王様が一番可愛がっていた女王の正体がウサギさんだったとはね。」

ナーレスが感心したように言った。

「そういえば、ナーレスは何かこの国についていろいろ知っているみたいけど、あたし達にも教えてよ。」

「あゝ、そういえば二人は知らないんだったね。」

そう言って、ナーレスは僕とスリィにいつの間にか聞いていたユードラの昔話を聞かせてくれた。

エストリアは黙って聞いていたが時折、目に涙を浮かべているようだった。

僕とスリィがようやくこの次第を理解すると、ナーレスは手で涙をぬぐっているエストリアに再度視線を向けた。

「で、エストリア。君はこれからどうするの？」

「え？」

ナーレスの突然の言葉にエストリアが固まった。

「ええっと……考えなかったんですが、このお城に残るのも寂しいですし、でも、世間的に見れば人間の言葉をしゃべるウサギなんておかしいですから、きつとまた見世物小屋に逆戻りかと……。」

エストリアの声が小さくなった。

彼の居場所はまだ、ないのだ。

僕は居たたまれなくて、ナーレスの方を見る。

「ナーレス、僕たちと一緒に……。」

「それはダメだよ。」

ナーレスの言葉に僕は肩を落とした。じゃあ、やっぱりエストリアは……。

僕がそんなことを考えていると、ナーレスはため息をついてエストリアを抱き上げた。

「一緒に旅はできない。俺たちの旅は危険だからね。」

俺の知り合いに庭師を探している奴がいるんだけど、もう庭仕事はしたくないかい？」

「したいです！！その人のもとで働かせてください！！」

エストリアがナーレスの首に抱きついた。

ナーレスは彼の背に優しく手を添える。

「じゃあ、そいつのところまで一緒に行こう。それでいいだろ？」
ナーレスの言葉に僕はうなずいた。

エストリアが鼻をすんすん言わせながら、泣いているようだった。
ナーレスはエストリアを地面に降ろすと、僕たちを見渡してこう言った。

「それじゃあ、早速出発するか。エストリアはこの国を出るまではスリイのぬいぐるみのフリをしてろよ。」

「はい！」

「よし、じゃあ行くぞ。」

ナーレスの声とともに、僕たちはこの不気味なお城を出た。

しばらく歩くと、入国手続きをした小さな小屋に着いた。

そこではあの担当者がいそいそと片づけをしていた。

「すいません、出国手続きをしたいのですが……」

「ここは国ではなく村だ。そんなものはいらないよ。」

担当者は来たときとは打って変わって笑顔でそう答えてくれた。

僕たちは顔を見合わせた。

やがて担当者はゴミをまとめると小屋に鍵をかけ、どこかへ言ってしまった。

そのまとめられたゴミの中に入国印と出国印が入っていたので、僕たちは自分でそれをパスポートに押した。

出国印は男性の顔：セシルの顔をしていた。

それから察するにきつと入国印の女性はジェシカだったんだろう。

セシルの描いていたユードラ王国は、数日のうちに夢と消えてしまった。

セシルの気持ちを考えると、少しかわいそうで悲しいと僕は思った。お城のほうを振り返ると今も雲の隙間からその姿を見ることが出来た。

やはり不気味で何かありそうな雰囲気は、もしかしたらまたセシルは復活して同じことを繰り返すのではないか、という考えを僕に起こさせた。

「まあ、そのときは俺たちはあんまり関わりたくないよね。」

ナーレスが僕の肩を叩き、苦笑いを浮かべた。

「そうだね。」

こうして、僕たちはユードラ国を後にしたのだった。

9. 出国（後書き）

最後まで読んでくださってどうもありがとうございました。
2話もよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0201b/>

Sunny Day Bloom 1

2010年10月17日03時06分発行